

月

むらさきいろの
あめのふるよる
あなたは静かに
腐敗していった
そのときぼくは
ビー玉のような
月を庭に埋めて
一人笑っていた

爪から零れる

血と土を

あなたの口のなかに

咲いた花々に

注ぐ

すると

言葉が生れるのだった

それを僕は
何もない夜空にささげた

夏の光のように
透きとおってゆく

僕の

手を握って

白いワンピースの

あなたが

駆けてゆく

地上は

枯れた花びらとなり

僕たちを載せたまま

こぼれ落ちる

深い

みずのなかに

遺跡のように

静かな

教室の窓辺で

僕は

黒い虹にふれる

あなたは

ポケットから

チョコレートのかわりに

夕焼けを差し出す

指のあいだから

絶え間なくこぼれる

光を

すくい上げて

飲み込んだ

地上は

蒼い蝶となり

甘い あなたの

指先にとまる

僕たちは 落ちてゆく

空白のなかへ

奈落のような

光に

犯された

十字路で

あなたの胸を

氷の槍が貫く

雨上がりの

子供のように

僕は

あなたの血を

跳ね上げた

空は
そまってゆく
あなたの命の
色に

……紫色の
雨の降る夜
僕は静かに
腐ってゆく
細い爪から
零れ落ちる
血と大地に
そめられて
白い掌には
ビー玉の月が
載せられて
ひとり笑う

あなたが
いなかった

スカートが
オーロラのように
ひるがえり
あなたは夜空になる

先生から渡された
プリントのように
その記憶を
腋に挟んで
僕は走った
やがて
あかるい
空になるまで

……二人のあいだを

あなたは
それを
のんだ

ああ
白くて
まるくて
おおきくて
しずかな
ほしの
名前
が
思い出せない
空は
血のいろの花で
溢れ
そこに

血のいろの花が落ちる
それをかつて

僕たちは
夕焼けと呼んだ

二人はまるく絡まりあう
それをかつて
僕たちは
月と名づけた

むらさきいろの
あめのふるよる
世界はしずかに
腐敗していった
そのとき二人は
ビー玉のような
月となり 地に
落下していった